

## 看護師物語

暴力と看護の対話的探求

友田尋子編著

植木野裕美, 白石裕子著

金剛出版, 四六判 262 頁, 3,300 円, 2025 年 7 月刊

(東京大学) 山本則子

### 看護独自の虐待へのアプローチをより広く知ってもらいたい

虐待は、看護師にとってとても身近な問題だ。虐待による外傷や心のトラウマを抱えた人たちが、治療を目的として看護師の前に現れる。小児看護学実習の引率教員として病院に入っていたとき、学生の受け持ちではないある患児に虐待を受けた可能性があり、病棟の看護師や医師が集まって相談していた。またあるとき、老人ホームの入浴サービスに来た高齢者の家族が、人前であってもかまわず高齢者に大きな声を上げ叩く様子も見た。虐待の専門家でなくても、一般の看護師がごく日常的に虐待という事象に遭遇する。看護の提供者として虐待の当事者になってしまった例も見聞きする。ケアする立場とは、他者のそばにいて手を差し伸べ助ける一方で、虐待という一見真逆な行為も可能となるパラドキシカルな立場である。以上のような経験をしている看護師は、虐待早期発見の最前線に立つ立場からも、自らの職業経験から虐待関係に独自の視点を持つことができる立場からも、虐待への有効な支援に参画できる職種と言えるように思う。

個別の親密な関係と多様な生活上の文脈から生じる虐待についての解明は、そのメカニズムも、有効な対処の道筋も、個別の当事者の個人的な経験を詳細に紐解くことからしか実現しないように思われる。『看護師物語』は、虐待事例を支援した看護師たちが、支援の当事者として悲しみ・怒り・共感を持ち迷いつつ活動した足跡を、対話の中で自らの物語として明らかにし、共有しようとしている。ケアの関係に全人的な自らを投じる職業だけに、親密な関係の中で生じる虐待の事例に、看護師ならではの共感的かつ治療的な介入が可能になるのだと、看護師たちの物語を読みながら思う。科学的なエビデンスと

ともに、臨床経験から得られた実践知の蓄積を活用し、目の前にいる人の命と生活をなんとか守ろうと懸命に奮闘する様子が生き生きと伝わる。虐待の連鎖と言われる家族の抱えた困難に対し、多職種で協働し政策を動かす様子を具体例で示す記述に、改めて胸を打たれた。

昨年6月に国際看護師協会が看護師の定義を新たにした。抜粋すると、看護師は「患者の安全と尊厳をまもり、アドボカシーを通じて働き、保健医療システムを強化し、公衆衛生を推進し、政策形成を行う。個人、家族、コミュニティと信頼関係を構築し、人々の健康や疾病経験について貴重な洞察を得る」(日本看護協会, 2025)。『看護師物語』の語りからは、まさに、この定義が挙げている看護実践そのものが読み取れる。

虐待へのアプローチには、多職種や社会システムからの重層的な協働が求められる。『看護師物語』を通じて、看護師がどのような場で虐待と出会い、何を目指してどのように活動しているかの具体をより多くの他職種や一般の人たちに知ってもらい、効果的な協働と有効な対処の普及の一助となることを願う。

### 文 献

日本看護協会 (2025) ICN「看護師」の定義. (<https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/document/definition/index.html> [2026 年 6 月 19 日 閲覧])